

第1回 中世における寺院の役割

【問い合わせ先】

市文化財課 ☎ 31-0623

益田には時宗萬福寺・臨済宗医光寺・曹洞宗妙義寺といった中世(平安時代末から安土桃山時代まで)以来の寺院が複数残っています。これらの寺院は、七尾城跡・三宅御土居跡をはじめとする遺跡同様に、中世益田の様子を現在に伝えてくれるものです。

これらの寺院は益田氏が創建したり、保護したりしていましたが、益田氏が益田の地を去った後も、地域の人々の崇敬を集め、大事にされていたからこそ、現在に残っています。中世の人々にとって寺院とはどのようなものだったのでしょうか。

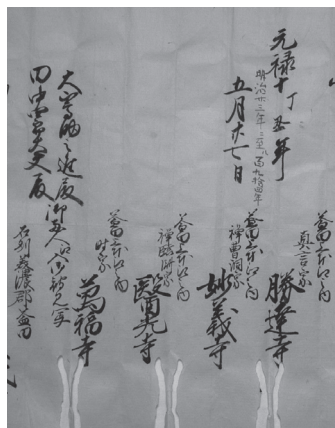
まず当然のことながら、宗教施設として人々の菩提(死後の冥福)を弔う場所であり、一族にとってのそのような寺を氏寺または菩提寺と言い、有力者は個人で菩提寺を持つこともありました。

また、仏教の知識は、中国や朝鮮からもたらされたこともあり、当時の僧侶には中国や朝鮮の最先端の知識を持つ者が多くいました。そしてその知識は権力者や地域にとつて貴重なものでした。

たとえば中国の文学に通じた者

は、中国との外交文書の起草(作成)に重宝されましたし、すぐれた土木技術を知る者は材木の伐りだしや治水に活躍しました。後者では、鎌倉時代に東大寺大仏殿再建のために、山口県の徳地からの材木伐りだしに活躍した重源という僧侶が有名です。

権力者はこのような優れた知識と技術を持つ僧侶を、精力的に招こうとしました。益田に中世以来の寺院が多く残っていることは、益田氏のそうした姿勢や、それを支える豊かな経済力があつたことを示しています。



▶ 「妙義寺文書」より萬福寺等連署書上控(一部)。元禄十(一六九七)年に勝達寺・妙義寺・医光寺・萬福寺の四ヶ寺が連名で寺領を浜田藩に報告したもので、中世以前の創建であることも記しています。